コロサイ人への手紙　第４章　６節

「あなたがたのことばが、いつも親切で、塩味のきいたものであるようにしなさい。そうすれば、ひとりひとりに対する答え方がわかります。」

　朝日を浴びて窓を開けたら、物干し竿にトンボが一匹飛んで来た。少しの間そこで休んで、飛び立った。朝の挨拶なのか、羽根の準備運動のためなのか分からない。たった一匹のトンボでも飛んで来てくれるとなんとなく嬉しい。もう秋だよと、住宅が建て込んでいる地域にも親切に教えてくれる。画面からは錦秋の映像がながれるが、青空の下、本物の秋は特別だ。

　目の前を飛ぶ一匹のトンボにこころ和ませられるのは幸いだ。交わすほんの一言に慰められ、励まされ、支えられる体験も幸いだ。その一言を聞く者が救われることも起こる。青空の下に飛ぶトンボではないが、澄んだこころから生まれる一言は人を救い、養い、導くちからを秘めていることを知っている。その一言は時が経過しても聞いた者のこころに生きている。

　いつもことばに思いを込め、親切で味わい深いものであるように。いつも、であるから、仮に聞こえてくることばが痛くても、扱いが好ましくなくても、それでも、語る時いつも、である。語る者のことば一言に思いを込めて、こころを尽くして親切なものであれ。

2021 年 10 月 29 日